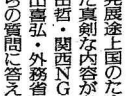
# 高校生の小さな一歩 大きな力

## 国際協力ひろば 私たちができることは

本年度三回目の「国際協力ひろば――私たちができることは」が八日、大阪・キタの読売大阪ビル内、ギャラリーよみうりで開かれた。今回のテーマは、高校生が考える国際協力」で、第一部では近畿、中・四国の高校生十二人がこれまで取り組んだことや、日ごろ授業や暮らしの中で考えた意見などを発表。「視野を広く持って、発展途上国のために何ができるか考えたい」といった真剣な内容が多かった。第二部は質疑応答で、平田哲・関西NGO（民間活動団体）協議会議長と中山喜弘・外務省経済協力局政策課事務官が出席者からの質問に答え、アドバイスした。

◆発表者◆
疋田真帆子（大阪府立住吉3年）
坂田裕子（同千里2年）
林　麻貴（　同　）
久保　綾（和歌山県立那賀2年）
伊藤暁子（小林聖心女子学院3年）
後藤魅妃（京都市立紫野2年）
佐伯八恵子（愛媛県立丹原2年）
中島奈奈（奈良県立高円3年）
木村清華（大阪府立住吉3年）
島村美奈子（兵庫県立芦屋南3年）
岡田光史（岡山県立岡山一宮2年）
西尾洋美（大阪府立千里3年）
◆助言者◆
平田哲・関西NGO協議会議長
中山喜弘・外務省経済協力局政策課事務官
◆コーディネーター◆
織田峰彦・読売新聞大阪本社生活情報部長

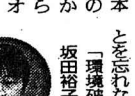
### 「私たちのできる国際協力の第一歩」



**疋田真帆子さん**

冷戦が終結しても、日本は軍事費を増やしている。震災の被災者とか、お年寄りのためなどに、もっと予算を使ってほしい。ODA（政府開発援助）についても、贈与分が少なく、ひも付きと批判されている。南アのアパルトヘイト批判の当時も日本は最大の貿易相手で、その国の多くの人々が何を求めているかに鈍感だった。しかし、素晴らしい話もたくさんある。エチオピアの大飢餓の援助に向かうスタッフが「地球という我々が住んでいる長屋の端が燃えだしたから」と答えたという話を聞いた。これが国際協力の大切な精神。地球規模で考え行動することを忘れないでいたい。

**坂田裕子さん**



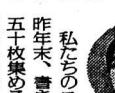
**林麻貴さん**

### 「環境破壊と国際協力」

環境破壊、特に地球の温暖化が世界の危機となっている。これは大量生産、消費、廃棄型の文明が、二酸化炭素を出しすぎているから。エネルギー政策の転換が必要と思う。

先進国は地球システムを超えて生産消費をしており、環境との共生で生きていた途上国は、環境破壊で生活のパターンが崩されている。途上国が開発を進めれば、温暖化はますます進むだろう。環境保護のため環境税を導入したスウェーデンのような施策を考えてほしい。

**久保綾さん**



### 「今、私たち高校生にできること」

ボランティアは「やってあげる」という意識ではいけない。私たちのユネスコクラブは、昨年末、書き損じはがきを二百五十枚集めると、タイで一人の子が中学校に通えると聞き、学校内に呼びかけて、正月を中心に約四百枚集めた。私たちの送ったはがきは一人の生徒の一年分の奨学金になると連絡があり、来年八月には、その子から手紙が来るのが楽しみだ。

身近な所で、はがき集めや募金、ゴミ拾いなどを全校生徒に広め、活動の規模を大きくして行きたい。

**伊藤暁子さん**

### 「災害における救援活動について」

昨年の阪神大震災で、私たちの学校も周囲も大きな被害を受け、海外を含め多くのボランティアの救援を受けた。特にNGOの救援が目立った。

NGOとは日本から途上国に援助する団体だと思っていたが、必要な所にはどこでも駆けつける、機動的で幅広い活動をする団体と知った。外国政府レベルの救援隊も多かった。

震災では、救援団体相互の協力や、海外からの受け入れが難しかったと言われた。これは、日ごろ国際協力に無関心だった私たちの側の問題だと思う。

### 「芦屋南高で学んだこと、そして生かしていくこと」

**島村美奈子さん**

私は国際文化科の三年生。二年の時、グループによる「地域研究」の授業があり、東南アジアの少女売春をテーマにした。十歳くらいの少女たちが麻薬やコカインに侵され、欧米や東洋の大人のおもちゃになっている生々しい実態、先進国の大人がやっていることを知り、ショックだった。キューバのカストロ議長についても五十枚以上のリポートを書いた。

高校生は学び、考え、視野を広げることが大切だと思う。それが行動を起こす時の原動力になる。

**岡田光史君**

### 「アムダ高校生会の誕生と今後」

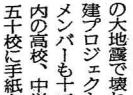
岡田光史君は岡山市のNGO「AMDA（アジア医師連絡協議会）の高校生会の一員だ。会は昨年九月に五人でスタート、事務所の掃除や倉庫の整理を手始めに、だんだん具体的な取り組みができるようになった。

アジア、旧ユーゴ、アフリカと三つのパートに分かれ、アムダの各地域担当のスタッフについて勉強した。自分は旧ユーゴを担当。今年二月、高校で現地に送るタオルを募った。地元の郵便局も協力してくれ、千八百枚を送り里子されているという礼状が届いた。春休みには旧ユーゴへのスタディーツアーに参加、破壊の生々しい姿を見てきた。

この春からは、中国・雲南省の大地震で壊れた現地の学校再建プロジェクトを進めている。メンバーも十二人に増えた。県内の高校、中学、小学校約七百五十校に手紙を書いて募金や文房具を募った。先月は街頭募金もやり、春から全部で五十万円になった。メンバーの大半はいま雲南の現地に入っている。

今年五月、岡山で「ボランティア高校生会」が結成された。高校生ボランティアへの助成金などの制度を設けてほしい。

**西尾洋美さん**



### 「モンゴルの火災について考えること」

モンゴルについて興味を持ったのは、テレビで小さな少年が羊の群れを追う姿を見てから。今年二月、八万平方キロの草原と森林を焼く大火災のニュースを聞き胸が痛んだ。日本など他国から、消火の手伝いはできなかったのだろうか。

被害は三十七億米ドル、国民総生産の四倍にもなるという。国の再建は大変だ。多くの国が支援していく必要があるだろう。

### 質疑応答

熱の入った発表に拍手する高校生ら

## 資金難のNGO多い
## 火災救援できない？
## 女性の自立に力点

### 地球規模で行動／震災で目立ったNGO／少女売春の実態学ぶ

――NGOにはいろいろな団体があるが、なぜあまり知られていないのか。

平田　NGOを支えて下さる人は少なく、ほとんどの団体は五百人以下だ。どこも資金難で、広告も出せないのでPRできない。ボランティアなどの希望があれば、ぜひ問い合わせてほしい。

中山　NGOは今後、もっと社会的に認められるようになる。政府としても、補助金を出す制度を作るようにしていきたい。

――災害の国際協力について聞きたい。モンゴル草原の大火で日本政府は何をしたのか。また、ミャンマーへの援助は軍部に金が流れるとアウン・サン・スー・チーさんが批判しているが、どうなのか。

中山　政府の緊急支援は「人命」にかかわるものが基本なので、モンゴルの草原火災についてはなにもしていないと思う。ミャンマーへの援助は事事政権がスー・チーさんを解放するまで凍結していた。その後、人道的援助を始めているが、これは病院建設や看護婦養成などで、スー・チーさんの主張は当たらない。

――現地で苦労した点や喜びは。

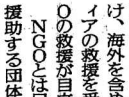
平田　今、バングラデシュで女性の自立を助ける活動をしている。それが成功し、収入の面で女性と男性の立場が逆転した。その姿が目に見えるのがうれしい。

――依然として男女差別があるが、女性は本当にNGOや外務省で働けるか。

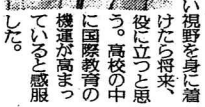
中山　役所には男女の区別はない。ODAでは、発展途上国の女性の自立に力点を置いており、女性職員をたくさん入れた調査団を出している。女性に開かれた役所だ。

### 助言者のコメント

#### 自主的な行動に感動



**平田　哲さん**

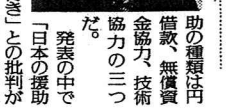


環境や難民問題などで、皆さんが「何ができるか」と真剣に考えて、自主的に身近なところから実行しており感動した。単に金を送るのでなく、自分を発見し、自分から変わろうとしていること。

だが、情報が偏ったものになっている点もある。図書館などで幅広いデータを集めて欲しい。

私たちが月一回開いているNGO大学などに参加して幅広い視野を身に着けたら将来、役に立つと思う。高校の中に国際教育の機運が高まっていると感服した。

#### 現地の実情学んで



**中山　喜弘さん**

国際協力に関心を持っておられることに感激した。今後、皆さんのような若い方にODAを支えてもらえると思っている。ODAの額は一兆三千億円で、国民一人当たり一万円になる勘定。援助の種類は円借款、無償資金協力、技術協力の三つだ。

発表の中で「日本の援助はひも付き」との批判があったが、円借款で日本企業が請け負っているのは二％に過ぎず、批判は当たらない。できるなら、ODAを通じ、現地の実情を学んでほしい。

### バザー、募金、テレカード集め／旧ユーゴにタオル／身近なことから

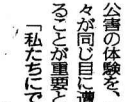
**後藤魅妃さん**

### 「自分の目で見たネパール」

高校一年の冬、ネパールに行った。カトマンズでは多くの車が真っ黒な排気ガスを出して走り回っていた。日本や他の国々が、環境基準以下の車を安く売りさばいているという。ぜんそくで多くの命が奪われた日本の大気汚染のことが思われた。

地方に行くと、水も空気も澄んでいた。川で沐浴を楽しみ、星の下で歌い、踊り、笑いあった。歌や笑顔は国境を超え、心を通わす手段と思った。日本の公害の体験を、開発を目指す国々が同じ目に遭わないよう伝えることが重要と思う。

**佐伯八恵子さん**



### 「私たちにできる国際協力」

国際研究部で実現可能な取り組みを探しフォスタープランに参加した。国際的な里親として、途上国の子に資金援助、教育と生活を保障するもので、四年前からボリビアの九歳の少年、ラモス君に年間六万円を送っている。

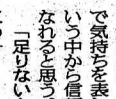
**中島奈奈さん**

### 「私たちの考える国際協力」

チベット東部の高原で猛吹雪のため氷点下四十度を下回り五十人が死亡、一万六千人が凍傷を負った時、ある女性の呼び掛けで食料、燃料、医薬品が送られたことを新聞で読んだ。こういう国際協力もあると知った。

日本は今は裕福だ。小さくなった服を送り、使用済みテレホンカードを集めて医薬品に換えるなどすぐやれることがある。何かをしてあげたいという気持ちが届けば、相手も何らかの形で気持ちを表してくれる。そういう中から信頼しあえる間柄になれると思う。

**木村清華さん**



### 「足りないところを埋めていこう」

途上国は食物は粗末で、着ている物も良くない。だが、精神的、人間的な面では、身内や友人以外に無関心な私たちよりも豊か。みな手を取り合って生きており、途上国を見習わなくてはならない。私たちは意識の転換を図り、世界が何を求めているかに目を向けて行きたい。

日本にも貧しい時代があった。多くの国に助けられて経済大国になった恩を忘れず、途上国に協力することができればうれしい。

**岡田光史君**



主催　読売新聞大阪本社
読売テレビ　国際協力事業団
関西支部　大阪府国際交流財団　国際ボランティア貯金普及協会
後援　近畿郵政局　関西NGO協議会　大阪府高等学校国際教育研究会　報知新聞社